

もの言う牧師のエッセー 第244話

「英国 EU 離脱」

「英国を苦しめるのは、国家より上に立つ“EU官僚”、あなたの雇用を脅かしているのは移民や難民、EUから抜ければ英国は自由を取り戻し、繁栄する。」

EU 離脱派の政治家らはそう危機感を煽り、19世紀末に流行った「栄光ある孤立」など大英帝国への郷愁を誘い、歴史的勝利を果たした。言うまでもなく現状に対する不満や怒りを抱いていた人々が英国を EU 離脱へと駆りたてた。実質賃金の減少、雇用不安、年金や福祉予算の削減、将来への不安、格差社会などなど。しかし、これらはEU加盟がもたらしたのではなく、世界のどこでも起きている問題だ。それどころか、EUから離脱することで問題が解決するなら英国はとっくに離脱していたに違いない。

世界大戦への反省から経済を一体化することで戦争のない欧州を築くために、フランスとドイツが中心となって各国政府が討議を重ねて EU を設立した。実利主義の英国は一步離れて統合を見極め、参加すれば得と判断し後から加わり、独仏主導に文句を付けながら英国を特別扱いさせ、得意の“EU 外交”で欧州を動かし、大きな勢力となることで影響力を確保するいっぽうで、金融や製造業はEU相手に利益を上げて来た。EUは英国にとって重要な市場であり装置なのだ。離脱していいことは何もない。よく内容も分からずに票を投じ、今頃になって後悔している英国を見て、英国をこよなく愛するオランダの著名ジャーナリスト、イアン・ブルム氏は「安易に自由を手放す選択をした英国国民の愚」という題で短文を発信。正に言い得て妙とはこのことだ。

実は聖書にある人類の「墮罪の物語」はこれに酷似している。神に造られた人間は、神と共に歩み、神からの祝福を豊かに受け、不幸も病も死もないエデンの園で幸せを謳歌していたが、ある時へびに化けたサタンが人間に近づき神からの“離脱”をそそのかす。

「あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」

創世記3章5節、

とあるように、神が人間に与えていた唯一の命令を無視し、食べるなど指定されていた園の中央にある「善悪の知識の木」を食した結果、彼らに罪とその結果である死が入り込んでしまった。神を独裁者であるかのように誤解し、よく考えもせず今よりも素晴らしい未来を勝手に思い描いた結果は、神からの祝福と自由を失うという最悪のものとなった。実はこれは昔話の類ではなく現代でも身近な問題だ。キリストは十字架にかかって神から離脱した人類を救ったが、今に至るも神の導きよりも己の考えを正しいとする人が後を立たない。教会に行かず、聖書も読まず、奉仕もしないキリスト者も珍しくない。だが思い出そう。神から離れていいことなど何もない。

2016-7-22

